



# 金沢の「七つ橋渡り」

**石** 川県金沢市の中心市街地は、浅野川と犀川に挟まれており、そこから引かれた辰巳用水や鞍月用水、大野庄用水などが縦横に走るため、大小様々な橋が架けられている。そのような土地柄からか、金沢では「七つ橋渡り」という民間行事が営まれており、浅野川に架かる橋を七つ、作法通りに渡り切ることができれば、寝たきりにならないという。

「七つ橋渡り」の作法は、例えば「浅野川に架かる七つの橋すなわち常磐橋・天神橋・梅の橋・浅野川大橋・中の橋・小橋・昌永橋などを、秋の彼岸の中日の前日の夜十二時から男性は真新しいふんどしかパンツ、女性も真新しい白い晒のおこしかショーツをつけて渡る。その際一言もしゃべってはいけない。そして家に帰ったら身につけていた下着を七日間つづけて水洗いをして、最後に干してから白い紙に包んで、紅白の水引をかけてタンスの底にしまっておく」といったものらしい。

面倒なので、実際に試してみる気にはならないが、せっかくだから我々も浅野川の橋巡りをするにことにした。まずは、応化橋から上流へと、右岸を進んで中島大橋へ。さらに行くと次の昌永橋は工事中だった。彦三大橋からは左岸に移り、小橋を渡ったところで、テレビカメラを持った一団がやってきた。

先頭の男が「あれが小橋ですね」としゃべっている。どこかで聞いたイントネーションだと思っただけ、テレビでよく見る戦場カメラマンだった。小橋のすぐ側にある「俵屋」という鮎屋の取材らしい。「ぼく前から来てみたかったですよ」と笑顔で話しかけられた。

俵屋は天保元（一八三〇）年の創業だという。約一九〇年の歴史を誇るわけだが、そういえば「七つ橋渡り」はいつから行われていたのだろうか。

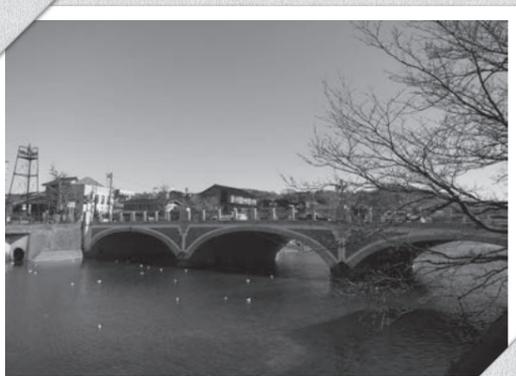
実は浅野川に正式な橋が七橋以上架かるのは、明治末期のことだった。それ以前も仮橋は架かっていたが、有料だったので庶民の間に「七つ橋渡り」が広まるには適さなかったように思える。

砺波和年氏の『百年のあとさき「米澤弘安日記」の金沢』は、米澤弘安という象嵌職人が残した日記をもとに、明治末から大正期の金沢の民俗を紹介した書籍だが、大正十二（一九二三）年八月二十四日の日記に弘安の母親が孫の百日咳平癒のために「七つ橋渡り」を行ったと記されている。

「七つ橋渡り」の発生について、砺波氏は明治の初めころから金沢で流行した「鳥居潜り」という行事が原型だと推測している。「鳥居潜り」は氏神の祭りの前夜に、石製の鳥居を七つ潜れば幸いがあるとい

うものだそう、で、「七つ橋渡り」とコンセプトが似ているからだ。

昭和二（一九二七）年に刊行された『稿本金沢市史風俗編第二』を見ても、「鳥居潜り」は記されているが、「七つ橋渡り」の記載はなく、昭和初期には民間行事として認知されていなかった可能性がある。これらのことから、「七つ橋渡り」は明治末から大正十二年までに生まれたと考えられるのだ。



浅野川大橋  
浅野川に架かる金沢を代表する橋

[交通] 応化橋から浅野川大橋までは、川沿いをゆっくり歩いて約40分

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi